



不幸な離職、そして幸運な復職

気仙医師会 滝田 有

1月の寒い日だった。半日診療をして、午後にロードバイクで路上に出た。一昨年からはじめた趣味だ。自宅から数百メートル、坂道を登っている最中に左の頭頂部に激痛が走った。今まで経験したことのない痛みだ。「このままでは転倒してしまう」、自分で自転車を降り路肩に横たわった。

近所の人たちが毛布をもって集まり、私を介抱してくれた。救急車を呼んだという彼らに向かって、「自宅に連れて行ってもらえば。寝れば治るから。」と今にして思えば無茶苦茶なことを口走った記憶がある。その後、意識がなくなった。

搬送先の病院で左中大脳動脈瘤の破裂によるクモ膜下出血と診断され、クリッピング手術を受けた。かくして一命を取りとめたが、数日後に起こるであろうスパスムも懸念されたため、仙台に搬送してもらった。結果的に運動麻痺を含めて後遺症は全くなかった。主治医団に懸命な治療をしてもらった。家族も必死であった。大変感謝している。6月には自分の医院で診療を再開することが出来た。全く奇跡的だと思う。

思い起こせば、私が開業を決意したのは40歳

のとき、平成12年のことである。開業医であつた父が72歳で亡くなった。

当時、私は大学の中では、人事の停滞のため、きちんとした身分が得られなかつた。一部の出来の悪い上司や後輩の尻拭いをやらされ、宮仕えがいい加減嫌になつてゐた。自分の存在意義を見出すのに、開業という選択肢は光り輝いて見えた。循環器科に付き物の訴訟リスクからも解放される。経済的なインセンティブも多少あつた。

開業後は順調に経過した。しかし5年目にに入った昨年春、突然の電話に衝撃を受けた。「大学の都合で循環器科は撤退する。残った患者はよろしく頼む」という地元の病院の循環器科部長からの宣告だった。後方で侵襲的治療手段を持つ専門家がいてはじめて、われわれ最前线の兵隊が成り立つののが循環器科である。その前提があっさりと崩れた。

昨平成19年は多忙な年となつた。患者数は当然飛躍的に増え、残業も増えた。臨時休診にして仙台や盛岡に飛び、循環器科の教授に気仙の窮状を訴えた日もあった。遅ればせながら電子カルテも導入した。入力作業が大変だとは露知らなかつた。お年寄りが在宅で看取られるのは

いいことなのかもしれない。しかし施設や病院からどんどん家に帰されると、開業医はオーバーワークとなる。平成20年の正月早々、数軒の時間外の往診をした。

近年、官僚やメディアによる開業医バッシングが著しい。厚生労働省の「医療経済実態調査」による「個人開業医の所得は勤務医のそれの2倍になる」という結果が診療報酬改定の際に医協に報告された。官僚は「儲けすぎている開業医」というスケープゴートを作り上げた。お調子者のメディアはまんまとその提灯を担いだ。中小企業の親父と大企業のサラリーマンの所得を同列に論じるものはまさかいないだろう。開業医と勤務医の比較はこれと同じ話である。

私の療養中、大学医局の厚意により、週に2回ほど代診の先生の応援を仰ぐことが出来た。全面休診を回避でき、患者への迷惑も最小限に

抑えられた。大変感謝している。しかし医院経営としてみれば、収入は減るが人件費は増えた。今回のように一朝事あるときのために、中小企業の親父が健康で働くときの収入は、借金の返済は言うに及ばず、生命保険や所得保障保険の莫大な保険料に費やさねばならない。サラリーマンのように収入が全部、可処分所得になるわけではない。

日本脳神経外科学会の調査によれば、クモ膜下出血は予後の悪い病気である。半数は亡くなり、4分の1は社会復帰不能となる。私のように社会復帰が出来るのは残り4分の1ということになる。知人で開業後数年にして同じような病気で倒れた男がいる。不幸にして彼は寝たきりとなつた。築き上げた診療所は、彼の意思とは無関係に、居抜きで売却された。彼も言いたいことは山ほどあったであろうに。その想いで本稿をしたためた。

自動車廃止論と言うものがあり、その効用として以下のものが上げられる。(一)年間7000人に及ぶ交通事故死亡者を始めとする交通災害が根絶される。(二)交通事故率に割かれる警察力を他の治安維持活動に振り分けられる。(三)交通事故がなくなり、救急医療への負担が軽減される。(四)道路建設が必要となり、道路整備費の社会福祉への投入が可能となる。(五)ガソリン消費が抑制され、原油価格が沈静化する。(六)排気ガスが減少し地球温暖化に歴止めがかかる。(七)近距離は徒歩で行くこととなり、メタボ対策に一役かう。(八)鉄道交通が見直され、赤字ローカル線が活性化する。(九)運転の心配をせず酒が飲め、繁華街がにぎわう。このようないいことづくめのようであるが、マスコミで大きく取り上げられることはない。大口スポンサーのご機嫌を損ねるような意見はタブーとなつてゐるからである。

(成澤靖)

せんとうよ